

びわこ文化公園植物だより〔β版〕

シキザキベゴニア シュウカイドウ科

・学名 *Begonia cucullata* Willd.

・園内各所のプランターに植栽、花期は春～秋



ベゴニアは世界の熱帯域を中心に 2000 種以上が存在する属で、原種・交配種ともに園芸植物として広く栽培されています。耐寒性のないものが多く、ほとんどの種は温室で栽培されます。その中でこのシキザキベゴニアは、多年草ではある

ものの種子繁殖が容易で成長が早いので、春から秋にかけて鑑賞できる1年草として屋外で栽培されます。花は赤、白、ピンク色で、八重咲きの品種もあります。袋入りの種子も市販されていますが、種子が細かく育苗が少々めんどうなので、苗を買ってきて植えることが多いようです。

ベゴニアの花を正面から見ると、花弁が4枚、十字型についているように見えますが、このうち小さな2枚がほんとうの花弁で、大きな2枚は「がく」と考えられています。つぼみのうちはこの2枚のがくが閉じていて、まるで貝殻のようです。

きれいだなぁと眺めているぶんには気づきませんが、じつはベゴニアの花には雌花と雄花の区別があります。雌花と雄花が同じ個体につくので、「雌雄同株」といいます。しかし、区別点を教えてもらわずに自力で雌花と雄花を見分けられる人は、よほど注意力のある人でしょう。2種類の花、見分けられるでしょうか？

貝殻が開いたような花の後ろ側を見ると、雄花ではただ柄がついているだけです。雌花では3枚の羽根のような付属物があります。この部分が花のあとに発達して、3枚の羽根をもつ果実になるのです。下の写真は、左が雄花、右が雌花です。



ベゴニアの花は、ほとんど(まったく?)蜜を出さないとされています。そのせいでしょうか、花に虫が来ているのを見たことがありません。しかし、果実はちゃんとできているので、たまには何かの虫が訪れることがあるのでしょうか。

ベゴニアの花を訪れる昆虫は、花粉を集めに来ていると考えられています。もしそうだとしたら、雌花には用がないことになってしまいます。しかしそこに、ベゴニアの花の進化の秘密があります。ベゴニアの雌花のめしべは黄色くモコモコと盛り上がっていて、一見、おしべと見分けがつかないのです。つまり、昆虫は見かけにだまされて、花粉のない雌花にもつい立ち寄ってしまうということになります。このように、生物が体の色や形を他の物に似せるのではなく、自分自身の体の別の部分に似せる現象を、「自己擬態」といいます。

シキザキベゴニアの花の大部分は雄花で、雌花は少ししかありません。花壇でみかけたら、雌花をさがしてみましよう。おしべのような色・形に進化しためしべが見られるでしょうか。

(龍谷大学農学部・三浦励一)

❁シキザキベゴニアは園内各所に植えてあるので場所を示していません。